

■肢体不自由のある子どもたちへの実践事例

マルチメディアDAISY図書が 身近な読書活動の一つとして活用されることを目指して

横浜市立上菅田特別支援学校

岩崎有美

はじめに

本校は、肢体不自由のある児童・生徒が218名（総84学級）在籍しています。小学部から高等部まであり、自立活動を中心とした学習、教科領域をあわせた指導を中心とした学習、教科を中心とした学習を行っている子どもと、発達段階や実態は幅広くさまざまです。

本校には図書室以外に、子どもたちが気軽に本に触れられるように「ひだまりコーナー」が設置されています。



ひだまりコーナー

「ひだまりコーナー」には、市立図書館と連携して、季節や行事に合わせた絵本や図鑑、読み物を配架しています。多くの子どもたちが図書室やひだ

まりコーナーを利用しています。昨年度より図書室とひだまりコーナーにもマルチメディアDAISY図書iPad版を常設しています。

本テーマでの研究も3年目を迎えます。iPad版を常設することで、休み時間などに手に触れる子どもたちは増えてきつつあるものの、授業に多く活用されるまでには浸透していない現状もあります。そこでこの取り組みを始めてから、見えてきた現状と課題について報告します。

マルチメディアDAISY図書活用 の実際

1 アンケート実施から見えた現状

本校では、マルチメディアDAISY図書を多くの子どもたちや教員に知ってもらうために、常設以外に年に1度、3～5日間各学級に貸出して活用できるようにしています。この計画後、対象教員に対してアンケート調査を実施しています。昨年度のアンケートでは認知度が7割、使用状況は4割でした。

今年度は、認知度が6割、使用状況は2割程度という結果でした。本校の7割の教員が、本校に勤務して初めてマルチメディアDAISY図書を知ったということがわかりました。使用状況が減ってしまった原因としては、年度当初にマルチメディアDAISY図書の活用についての説明が周知されていなかったこと、どのような読み物があるのかが伝わっていないことが挙げられます。

アンケートを実施して見えてきたこととして、活用している子どもたち、教員が固定化されている、個別課題学習など個別では活用されているが集団学習での活用頻度が少ないということ、iPad版の存在は知っているが、CD版の存在を知らないという教員がいることが見えてきました。

本校では、各学級に希望調査を行い、希望する学級にはCD版を配布していますが、学級にCD版が置いてあることを知らない教員が多いのではないかということが感じられました。

2 学習活動中での取り組み

(1) 個別課題学習

・高等部1年 女子生徒1名

『ことこと ことこと』（おでんの作品）

本校高等部は、教科を中心とした「教科コース」、教科領域を合わせた学習を中心とした「すてっぷコース」、自立活動を中心とした「そうごうコー

ス」があります。

すてっぷコースやそうごうコースでは、生徒の実態に応じて学習する個別課題学習を行っています。個別課題学習では、図書室を利用する生徒も多く、自分で選んだ本を自分で読んだり、教員が読み聞かせを行ったりしています。対象生徒は、絵本の読み聞かせには、興味・関心はあるのですが、視覚からの情報を受け入れる学習が難しい部分があります。

しかし、側に本を近づけると意識して視線を向けることができます。図書室でも本を選ぶときはできるだけ見やすい位置に提示して借りる本を選んでいます。食べ物に興味・関心もあり、iPad版を提示し、いくつかの物語のタイトルを伝えると、『ことこと ことこと』に興味・関心を示したので読み進めていきました。



好きな1冊、みつけた

iPad版は、手軽に提示しやすく、画面の大きさも丁度良いため、生徒にとっても見やすいものでした。語りに耳を傾け、画像が変わるたびに、画面に視線

を向けて最後まで集中して読み進めることができました。また、画像が絵ではなく写真であったため、より生徒の興味・関心を引き出すことができました。

(2) 集団学習

・高等部1年 学級活動

『すもうのいろは』

本学級には、教科コース、すてっぷコース、そうごうコースの生徒8名が在籍しています。本を読む、または読み聞かせに興味がある生徒、本を読むことに対してあまり関心がない生徒と実態はさまざまです。

生徒たちは昼休みや給食の時間になると友だちや教員といろいろな話をします。話をするのが難しい生徒も周りの会話を楽しんでいます。

あるとき、文化祭の発表内容を決める際に相撲が話題になりました。そこでCD版を活用し、テレビ画面で『すもうのいろは』をみんなで見ることにしました。



『すもうのいろは』をみんなで鑑賞

ふだんはテレビで相撲を見ることのない生徒たちですが、相撲についての説明がはじまると、「へえ、そういう意味があるんだ」「知らなかった」などと言いながら全員がテレビ画面に集中していました。『すもうのいろは』が終わり、目次を出すと、生徒たち自ら「次、どれを見ようか」と相談を始め、話し合い、次に見る物語を選んでいました。物語を聞き、画面を見ながら笑ったり、「こんな話だったかなあ」と会話をしたりしながら楽しんで読み進めていました。ふだん、図書室を利用して本を読まない生徒も、友だちと一緒にテレビ画面を見ながらの活動では、楽しく読み物に触れることができました。

おわりに

今年度のアンケートには、歩行の学習の中で、iPad版をゴールに設定して、マルチメディアDAISY図書を見るために歩いて、そこまで行く楽しみや、『ぺったんサンドイッチ』の話に合わせて手や頬を触り、教員とのやりとりを楽しむことでコミュニケーションを図った事例もたくさん挙げられました。

また、子どもたちが一人で操作して読み進めたり、iPad版と一緒に声をだしたりと、活用方法は一人ひとり違っていました。

マルチメディアDAISY図書の利用を

活性化させるためのアイデアについての項目をアンケートに設けると、活用方法がいま一つわからない、有効に活用ができなかった、活用方法についての研修会を設けてほしい、どのような活用方法があるのか実践事例を知りたいなど、教員に対しての課題が見えてきました。

『わいわい文庫活用術』やCD版のアナウンスはしていましたが、活用方法についての周知は行っていなかったため、教育活動においてのマルチメディアDAISY図書の浸透が図れなかったと考えられます。

昨年度はアンケートを実施したもの

の、結果を教員に対して報告していませんでした。今年度はアンケートの結果を報告し、教員で共有し、次年度は、教員に対して年度当初にマルチメディアDAISY図書の利用方法や『わいわい文庫活用術』の紹介をして具体的な事例を伝え、利用方法を周知していきます。

マルチメディアDAISY図書は、子どもたちの実態に合わせていろいろな場面で活用できる手軽な教材です。そのため台数に限りはありますが、たくさん子どもたちにいろいろな場面で活用してほしいと思います。そのためこれからも、身近な読書活動の一つとして活用の推進に取り組みます。

